

ONE LOVE 通信 34号

2007年6月30日発行

日本で気になるのは、電車に乗っている人が、携帯電話とにらめっこしていること。びっくりしたのは、居酒屋に来ている若者3人組が、それぞれ携帯電話でおしゃべり。ルワンダも携帯電話がドンドン普及しているけれど、人と一緒のときは、目の前にいる人との会話を楽しんでいる。どこかおかしいぞ、ニッポン。



【研修員パトリックお疲れさま】

義足の研修に来ていた3人目のパトリック。3月に無事(?) (はてなの意味はあとで…) 修了。今回は、親方ではなく、親方のお弟子さんのところで6ヶ月。果たしてその成果は?

着いてすぐに1ヶ月の日本語研修。日本に来る前に、



【研修先の徳田さんと】

ルワンダにいたボランティアから特訓されたせいか、日本語は前の2人よりも上達が早い。前の2人の時は、ルワンダでボランティアをしていた女性が、研修員の宿舎(研修センター)で働いていて、何かと身の回りのことを

世話してくれたので、安心

だったけれども、今回その彼女は研修センターを辞め、再びルワンダへ。だからパトリックは一人。しかも、8人の研修員のうち、男は2人だけ。がんばれパトリック、自分のことは自分でやるのだ! 甘えるんじゃない!

そして6ヶ月の技術研修。今度の研修先には若い人もいて、結構仲良くやっていたようだ。義足や装具の作り方も、その社長さんからももちろんですが、若い衆にもたくさん教わったようです。しみじみ言っていたのは「日本はたくさんの機械や材料があるからいいなあ…」と言うことでした。パトリックはポリオのため、装具を履いているのですが、研修中に自分の装具も作ったようであります。

しかし! ここでさっきの「無事」に続くはてなマークが出てくるのであるが、なんと! 肺炎にかかってしまった! もともとちょっとひ弱なパトリック。ルワンダにいるガテラの元に電話がかかってきた。

「どうも病気になるのだけど、入院すべきか迷っている。ボス(ガテラの事)が日本に来るのを待って、入院したほうが良いのではないだろうか…。」実際、ガテラと私はもうすぐ日本に行くというスケジュールが目の前にあった。しかし! だからと言って、病気になるのに入院を伸ばすってのは…。年齢的にも精神的にも、今までの中で

が一番幼いパトリック。どうやら自分で決断が下せないようである。電話ではどんな病状かはっきりしないものの、とにかく入院をさせた。

そしてガテラと私、日本へ。次の日病院に行った。パジャマ姿のパトリックは少ししぼんでいた。本人はとにかく自分の病状をはっきり把握できていないことが不安のよう。看護婦さんによると肺炎にかかってしまったとのこと。原因は? 本人曰く、義足を削る時に出るホコリが良くないとか。しかしこれは直接の原因ではないようである。最近、ルワンダでは肺炎がにわかに流行っており、もしかしたらルワンダから持ってきてしまったのか??

そしてもう一つパトリックを不安にさせているのは、入院することによって、自分が勉強する時間が減ってしまうということ。でもこれは仕方がない。研修先のボスはパトリックに言った。「充分勉強したから、もう教えることはない」もちろん、そんなことはない。勉強に終わりはない。しかしそう言ってパトリックを納得させるしかなかったのであります。

何だかんだと、入院すること1ヶ月。その間、たくさんの方がお見舞いに来てくれたそうである。研修を受け入れてくれた神奈川県職員、研修センターの人、研修先のボスと若い衆、そしてパトリックの友だち。頼れる家族がいない異国で病気になるほど心細いことはない。



【神奈川県知事より終了証書を頂く】

退院してしばらくの間、自宅療養。その後研修先に復帰。しかしルワンダに戻る日はもう目の前。

神奈川県庁で修了証書をもったり、研修センターでお別れパーティを開いたり。帰国前はとても忙しそうだった。

今年の研修生8人は、とても仲が良かったような気がします。そしてたくさんの日本の人と交流を深めたようです。お別れパーティには座りきれないほどの友だちが訪れていました。



【研修お疲れさま】

しかし！なんと！治ったはずの肺炎、もう片方の肺に病巣発見！本当ならば、今一度入院して治したほうが良いとのこと。しかしパトリックは、気持ちがもう帰るモードになっている。本人曰く、「ルワンダで治す」

やはり長いこと故郷をあとにすると、帰りたくなる。よ〜くわかります。無理やり入院させても、精神的に疲れるだろうと判断し、本人の望むとおり、帰国の手続きをする。

空港へは県の職員の方、研修センターの人、ガテラと私がお見送り。持ちきれない荷物は、今回送ろうと思っていたコンテナに詰めた。それでもまだたくさんの荷物。

みんなが別れを惜しみ、パトリック一人、搭乗手続きをするためにゲートへ向かう。「バイバイ、パトリック。またね。」しかし彼は一度も後ろを振り返らず、さっさとゲートへ。少しはこっちのセンチメンタルな気持ちを感じなさいっての！

と言うわけで、パトリックは無事(?)日本での研修を終えたのであります。ルワンダでパトリックを迎えるボランティア2人。日本語でしゃべりまくる彼を見てビックリ。しばらくの間病気を治すため休暇を取り、今は現場に復帰しています。前の2人同様、パトリックが今後、どんな青年に育っていくか。乞うご期待！

【そして4人目の研修員は?】

神奈川県には本当に感謝です！2007年度も、ワンラブのスタッフが研修員に選ばれました！もう3人も送り込んだので、今年は無理だなあと考えていたのですが、なんと！今年には女性の義肢装具士です！

彼女の名前はディアネ。若干20歳。今ワンラブで義肢装具士見習いとして働いています。

彼女が義肢装具士になりたいと思ったのは、お父さんが障害を持っていたから。もう亡くなったということですが、彼女のその気持ちに心を打たれました。

そして私が応援したいのは、彼女が女性であると言う

こと。ルワンダにはまだ女性の義肢装具士がいません。ワンラブを訪れる女性の障害者の中には、男性の義肢装具士に自分の患部を見せることに抵抗を感じる人もいます。だからずっと、女性の義肢装具士を育てたいと思っていました。

8月には日本にやってきます。今回は、再び親方のところで修行をします。彼女がルワンダ初の女性義肢装具士としてやっていけるように、早速親方に一言。「女性だからと言って甘やかさないで、いつものようにしごいてください」

彼女も前の3人同様、日本語は全くわからない。でも現在ボランティアの男性によって特訓を受けているはず。



特訓にはしっかりくらいついてきているよう。

さてさて、どうなることやら。ルワンダは世界でも有数の女性閣僚の多い国。がんばれディアネ。男たちを蹴散らし、女のパワーを見せてやるのだ！

【隣の国にお邪魔します】

去年から作戦を練っていたこと一つ。ブルンジへ義肢製作所を展開すること。

97年にルワンダのキガリに義肢製作所を開いてから10年。試行錯誤を繰り返しながらやってきました。ルワンダの主要の町に支部を開き、スタッフを常駐させたこともありました。残念ながら、現在は継続していません。何故ならば、スタッフがきちんと働かないから。だから現在はキガリの義肢製作所のみで、製作を続けています。

しかしここ数年、目立ってきたこと。それは隣の国ブルンジから訪れる障害者が増えてきたということ。話を聞くと、ブルンジには義肢装具を作る場所が一箇所もないとか。だから噂を聞いて、わざわざ国境を越えワンラブまでやってきます。

そこで行動開始。ブルンジの政府と話し合い。ルワンダと同じようにNGOとしての活動を認めてください。全てがゆっくりのアフリカにしては早いペースで交渉が進み、去年の暮れにはNGOとして認可されました！まずは5年間の活動許可。拠点となる場所を探し、現在準備中。

そしてさらに交渉は続く。活動を進めていくためには、どうしても資金が必要。ルワンダではなかなか政府の資金援助が得られず、義足を作る材料・スタッフの給料・運営費などは、ほとんど全てワンラブ持ち。

ブルンジでは最初から、政府の援助が必要であるということを出し、義足にかかる材料費の6割を政府負担でお願いできないかと掛け合う。ブルンジ政府も、私たちの義足作りの実力を知らないの、なかなか首を

縦に振らない。そこで今プッシュしているのは、まず15人分の義足を作らせてくれということ。その出来を見て、ワンラブを資金的に援助するかどうかを決めてください。その交渉のため、ガテラはルワンダとブルンジを行ったり来たり。忙しい毎日を送っています。

ブルンジでの仕事が本決まりになれば、日本で勉強をしたセザールかエマーブルが駐在する。日本の技術がさらに国境を越え、伝わっていく。

ブルンジはルワンダ同様、日本では馴染みのない国です。でもたどってきた歴史はルワンダと似ています。西洋の国が入ってきたことにより、国民が分けられ、対立が続いています。その対立のために、障害を負う人も少なくありません。

ブルンジはタンガニーカ湖のほとりにあり、首都のブジュンブラは水辺にあるため湿度が高く、暑いです。そして蚊がたくさんいます（特に空港の蚊攻めはすごかった！）。



【タンガニーカ湖】

ルワンダでは紛争が終わり、国を立て直すことに力を入れています。ブルンジでは今尚続く小競り合いのため、国の復興に力を入れられない状態です。町を歩いていても、道が舗装されていなかったり、道端に草がぼうぼうはえていたり、どことなくルワンダよりも遅れているといった印象を受けます。

義足を作るところがないというのが、驚きでした。足をなくした人は、政府の援助が受けられる場合は、南アフリカやヨーロッパに義足を作りに行くそうです。でもほとんどの人は、そんな援助を受けることができない。援助を受けたとしても、政府の負担（航空券代・宿泊費・義足代など）は大変です。

皆さま、相変わらず試行錯誤を繰り返しているワンラブですが、どうかブルンジの人にも義足が行きわたるよう、ご協力をお願いします。

【アビリンピックをご存知ですか？】

皆さま、アビリンピックをご存知ですか？

およそ4年に一度、約30カ国から選ばれた満15歳以上の障害者が参加し、26種目の職業技能と4種目の生活余暇技能を競い合う大会です。種目は義肢製作・CAD・コンピュータプログラミング・洋裁・家具製作・刺繍・編み物など多岐にわたってあります。

大会は11月に静岡で行われます。これを教えてくれたのは、とある場所で活動報告会を行った時に来てくださった一人の男性。早速、アビリンピックについて問い合わせしてみました。



まだこの大会はあまり知られていないため、ルワンダからも参加をしたいと話したら、歓迎してくれました。私たち自身もアビリンピックと言うものを良く知らないで、今回はまず大会を知るための参加。ガテラと私がまずオフィシャルとして参加、そしてできることならば、一人ルワンダから選手を連れていければ…。

現在、ルワンダでガテラが選手を探しています。種目はまだ決まっています。それぞれの技能を持っている人を集めて、その中から選ぶという作戦。現在候補として上がっているのは、籠製作・洋裁・刺繍・編み物。残念ながら、義足の製作は、日本と使っている材料が違うため、ワンラブのスタッフには難しいかもしれません。

このアビリンピックでどの程度の腕が要求されているか、全くわかりません。ルワンダの人たちがそれだけの技術を持っているかどうかわかりません。

でも2000年に初めてパラリンピックに出場した時のように、まず参加すること。これが大切。

果たしてルワンダの選手を見つけることができるか？どうぞ日本の皆さま、ルワンダの障害者の可能性を広げていくために、彼らが参加できるように、ご支援ください。お願いします！

アビリンピックにご興味のある方は、こちらのホームページまで。

<http://www.skillsfestival2007.or.jp/abilympics/en/index.html>

【長崎を訪れて】

今回、初めて長崎を訪れました。前から行ってみたいと思っていたところでした。長崎で活動をなさっている、国際的な女性の団体から招待され、ガテラと2人でお話をさせていただきました。

何故、この地を訪れたかったか？それは原爆の被害にあったところだったから。原爆でたくさんの人を失ってしまった、同じようなことを経験したルワンダの人は、原爆にとっても関心があります。ルワンダにいとよく質問されます。原爆のことを。そしてそれを何も知らない私。

原爆資料館、平和公園など、連れて行ってもらいました。被害者が着ていた洋服、その当時の写真、原子爆弾の模型。どれを見ても、心が痛い。



【長崎平和記念公園にて】

長崎や広島、自然災害で壊れてしまった町、紛争で崩れてしまった建物。そこに住む人は、自分たちの生きる場所を作るために、動き出します。

この頃ガテラはよく言う。人間が生きていくためには、教育と技術が必要だと言うことを。でも原爆を見て、ポツリ。「原爆も一つの技術だった」

そして出た結論。「正しく技術が使われて初めて人類は進歩していく」

また長崎を訪れたいと思います。そして同じように苦しんでいる広島にもいつか行ってみたいと思います。

【コンテナ、やっと送ったぞ！】

4月末、いろいろなところで集めてもらった援助物資・車椅子・車のエンジン（ルワンダで乗っている車がついに壊れてしまった！）、そして中古の車庫などをコンテナに積み込み、やっと送り出すことができました！

学校に呼びかけて集めてもらった古靴、ずっと預けっぱなしになっていたので、申し訳ないことひとしお。それを送り出すことができ、ホッと一息。この通信が出ている頃には到着し、それらを取り出す手続きをしていることだろう。



日本から【大量の車椅子】 7月。そして陸送。こんな時、海のある国だと輸送費が安くつくし、時間もかからないのになあ。内陸国のつらいところ。



【コンテナに入れる荷物】

日本で集めたいものはたくさんある。でも輸送費のことを考えると躊躇してしまう。40フィートのコンテナを送るのに200万近くかかってしまう。だからちょくちょく出すことができない。しかしまったくもって日本は宝の山。もう少し輸送費が安ければとつくづく思うのである。

【アフリカン・フェスタで考えた、日本人とアフリカの人の違い】

毎年5月、日比谷でアフリカン・フェスタが開かれます。アフリカ大好き人が集まるお祭りです。

ワンラブも一度参加したいと思っているのですが、気がつくといつも締め切りが過ぎてしまっている。

と言うわけで、今年はとりあえず見に行ってきました。日本にこんなたくさんのアフリカ好きがいたのか？と思うほど。特に食べ物を売っているブースは、人垣で中をのぞけません。

あちこちでアフリカの衣装をまとった人。しかしどうもしっくり来ないのは、日本人の肌の色のせいだろうか？それとも体格のせいだろうか？日本人がどうも貧相に見えるのは、その立ち振る舞いに原因があるようだ。まず姿勢が悪い。私もアフリカの人に負けないように堂々として、と背筋を伸ばすが、気がつけば曲がってしまっている。そして歩き方。どうも日本人はべたべたと足を引きずるように歩く傾向にある。

つくづく思う。神様は不公平だと言うことを。何故、アフリカ人は（もちろん全てではありませんが）あんなにスタイルが良いのだろうか？一番すばらしいのはお尻！時々、どうしてそんなにまったいらなのと思うお尻をしているアフリカの人もないわけではないが、たいていすばらしいお尻をしている。恐ろしいのは、あまりにお尻が上につきすぎて、座るとズボンの上からそのお尻が見えてしまうということだ。そしてそれは決してヒップハングのズボンを履いているわけではない。

そして足。日本人のようにししゃものようなふくらはぎをしている人は少ない。カモシカのようなという表現がぴったり。しかし、彼らは彼らで、日本人の大根足にエキゾチシズムを感じていると言うことも事実。たまに足を出していると、ほめられることがある。

さらに体のばね。アフリカの踊りを真似することは難しい。日本人にはやはり日本舞踊もしくは盆踊りが一番あっているのでは…。

しかし私が目指すのはマーケットマミーの体格である。でっぷり太って、赤ちゃんなど5～6人抱えられるような二の腕。ウェスタンラリアートをくらったら、2～3時間脳震盪を起こしてしまうような、あの二の腕。

それから。どうもアフリカの人と日本人と、身体の肉の密度も違うようだ。これは赤ちゃんをさわった時に良くわかる。肉が張っているのだ。指がはじき返されてしまう。そして抱っこすればもっとよくわかる。重いのだ。生まれたときから筋肉の塊。日本人は体格も幼く、顔も幼いので、どうもなめられてしまうことがある。そんな時に私はマーケットのおばちゃんの体格を思い出す。

と言うわけで、ひたすらアフリカの人体型に憧れている私は、アフリカン・フェスタで見たアフリカのドレスを着ている日本人が貧弱に見え、疑問を感じてしまう。しかしそういう私も、時々アフリカのドレスを着て悦に入っている。ああ。

【映画が伝えたかったこと】

ルワンダの虐殺は4月7日に始まった。と言うことで、東京渋谷で、その日を皮切りに2週間、ルワンダの虐殺をテーマにした映画祭「シネマアフリカ2007」が開催された。「記憶の守人たち」など8作品が上映され、5月にはアンコール上映もあった。

日本でも「ホテル・ルワンダ」や「ルワンダの涙」などが上映され、にわかにルワンダが話題になっていたが、それに対して不満もあった。それは何故か？それらの映画が、外国人によって撮られたからである。

今回上映された映画は、一部を除いて、全てルワンダ人によって撮影されたもの。これはとても大切なことである。

外国人によって撮られた映画がいけないというわけではありません。でもピントが外れていることが多いです。お涙ちょうだいであったり、ヒーロー仕立てにしてしまっていたり…。

日本で「ホテル・ルワンダ」が評判になったのとは反対に、ルワンダではほとんど評価されていません。それは一人の人にスポットをあて、ヒーローにしてしまったから。そして映画を見て感激した人をがっかりさせたくないで多くを言いたくないけれど、伝えられていない驚愕の事実があったから。やはりお客さんを集めるためには、起承転結を作らなくてははいけない。その結果があの映画だったような気がします。

しかしルワンダ人の撮った映画は、最後に結論が出ない。まだ出せないのです。虐殺から13年経っても、人々の心はまだ傷ついているし、相変わらず悪巧みを考えている人がいるからです。

だから今回のルワンダ映画祭は、ルワンダ人にとってとても意味があったと思います。ルワンダの人が世界に伝えたいことは、家族が見つかってめでたしめでたしということではなく、だからこれから自分たちはどうやって生きていけばよいのかと言う問いかけなのではないでしょうか？

私のお薦めは「4月の残像 (Sometimes in April)」と言う映画。

これはルワンダ人が撮った映画ではありませんが、ルワンダ人の苦悩を非常に細かく伝えています。そしてそれに対してルワンダ人がいかに闘っているかということを知ることができます。

機会があったら、ぜひご覧ください。

【英語のホームページができたよ】

皆さま、英語のホームページができました。今までのホームページとは別に、世界の皆さまにも見てもらおうとやっと英語のホームページを立ち上げました。このHPからは、ワンラブのゲストハウスへもアクセスができません。最近、にわかに外国からのゲストハウスへの問合せが増えたのも、このおかげだと思います。

まだ十分な情報を載せていませんが、これから少しずつ充実させていこうと思っています。乞うご期待！

<http://www.oneloveproject.org/>

【米百俵賞に選ばれました】

皆さまのご支援のおかげで、ワンラブの活動が、米百俵賞に選ばれました。この「米百俵賞」と言うのは、新潟県の長岡市米百俵財団が、育英百年の大計に立った郷土の先覚者・小林虎三郎の遺徳をしのび、その思想を表す「米百俵」の精神を継承・発展させるため、人材育成に著しい功績をあげた個人又は団体を表彰するものです。

実は毎年応募をしていたのですが、惜しいところで入賞を逃していました。しかし今年、ついに賞をいただきました！

これもひとえに、皆さまが応援してくださったおかげです。本当にどうもありがとうございました。賞金100万円は、ルワンダの障害者自立のために、大切に使用させていただきます。

また授賞式では、同時に画家の原田泰治さんの講演があり、講演前の楽屋を訪ね、お話をすることができました。

原田先生は子どもの頃に小児麻痺にかかり、足が不自由です。そのことで、まずとても身近に感じてしまいました。とても優しくそうな人ですが、心の強さも感じられる人でした。講演の時は子供のときの苦労話を面白おかしく話してくださいました。



【原田泰治先生と】

【求む！書き損じハガキ】

この間、小学校でたくさんの書き損じハガキを集めてくれた。その数、1000枚以上。今まで集めたハガキを合わせ、郵便局に持って行ったらなんと！90000円以上の切手に換えることができた！集めてくれた皆さん、ご協力どうもありがとうございます。

そのことを助っ人A子ちゃんに伝えた。彼女は早速調べた。大きいNGOでは、書き損じハガキを集めるだけで、なんと年間1800万円の資金となるそうだ！

ワンラブはそれほど大きな団体ではないので、そんなにくさんのハガキは集まらないかもしれないけれど、これを見逃す手はありません。

と言うわけで、これからは皆さま！ワンラブでは書き損じハガキ、未使用ハガキ・切手・テレホンカードを「真剣に」集めています。

余った年賀状、これからはなら暑中見舞いのハガキ、どしどしワンラブに送ってください。特に学校の先生。ぜひ生徒のみんなに呼びかけてください。学校という力は強いです。一つの学校に1000人の生徒がいるとして、一人が一枚のハガキを持って来れば、1000枚。つまり45円（手数料として5円引かれる）×1000枚＝45000円になります！

みなさんのご協力、お待ちしております！

【求む！英語訳ボランティア】

英語のホームページが完成し、さらに今までの日本語のホームページも英訳したいと思っています。どなたか英語の得意な人、力を貸してください。あるいは、そういうボランティアをどこで探せばよいか、お心当たりはございませんでしょうか？

ご連絡お待ちしております。



<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>
ブログをはじめました！！
ワンラブ話からルワンダのあれこれまで
「ワンラブ・プロジェクト ルワンダ日記」
ご覧ください！！

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。
ご寄付は下記の口座まで、ご支援よろしくお願いいたします。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させていただきます。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0054 茅ヶ崎市東海岸南6-6-69 Tel: 0467-86-2072 FAX: 0467-86-2092

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所)

onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 34号

2007年6月

発行：ムリンディ/ジャパン・

ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info>



【おことわり】当団体はご提供いただいた個人情報について、皆様からご同意をいただいた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。 - 6 -